



デュルケーム / デュルケーム学派研究会

Japanese Association for Durkheimian Studies

ニューズレター

第6号 [2005年12月25日発行]

会長 大野道邦 <mitikuni@mua.biglobe.ne.jp>

郵便振替口座番号：00980-4-20999

編集事務局 奈良女子大学文学部

(口座名称)デュルケーム研究会

0742-20-3264, 3259

編集 中島道男

江頭大蔵

小川伸彦

<mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp><ogawax@dream.com>

デュルケーム / デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中にあって、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム / デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的に開催する。

第10回研究例会 (2005年4月23日、尚絅学院大学)

報告1 池田祥英 氏 (早稲田大学)
デュルケームとタルドの論争：sociologie と sciences sociales をめぐって

コメンテーター：北垣 徹 氏 (西南学院大学)

報告2 山田陽子 氏 (広島国際学院大学)
デュルケームの道徳的個人主義と「心の時代」

コメンテーター：嶋守さやか 氏 (桜花学園大学)

第11回研究例会 (2005年10月1日、早稲田大学)

報告1 西山宝恵 氏 (東北大学)
パーソンズのデュルケーム論
『社会的行為の構造』以後に着目して

コメンテーター：油井清光 氏 (神戸大学)

報告2 菊谷和宏 氏 (和歌山大学)
トクヴィル、デュルケーム、ベルクソン
社会学的人間観 / 社会観の歴史的形成と
生の意味回復への方途

コメンテーター：北川忠明 氏 (山形大学)

【第10回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 池田祥英（早稲田大学）

デュルケムとタルドの論争：sociologie と sciences sociales をめぐって

デュルケムとタルドの論争において最も知られているのは、デュルケムの社会学主義とタルドの心理学主義という社会学の方法論をめぐる対立であろう。この方法論をめぐる論争については、『自殺論』（1897）における模倣論批判に対してタルドが回答しなかったことで本格的な論戦は終結したと見ることもできる。ただし、その後1903年になって、デュルケムとタルドが「社会学と社会諸科学」というテーマで公開討論を行っていることは注目に値する。この討論においてデュルケムとタルドは、社会科学において社会学をどのように位置づけるのかという問題について立場の違いを明確化しようとしていた。そこで本報告では、この公開討論をこれまでのような方法論をめぐる論争とは別の新たな問題を提起したものとして考えてみたい。そのうえで、この1903年という時点と「社会学と社会諸科学」というテーマに焦点を絞り、デュルケムとタルドがそれぞれどのような主張を展開していたのかを探っていくことにする。

1. 1903年のデュルケム＝タルド直接対決

1903年12月にパリの社会高等研究院（École des hautes études sociales）で「社会学と社会諸科学」に関する講演が行なわれ、デュルケムとタルドはそのうちの「一般序説」においてそれぞれ自説を展開した。デュルケムはすべての社会現象に共通する一般的な要素を取り出すことは現時点では不可能であり、それよりも専門分化した個別社会科学の成果をひとつずつ積み重ねていくことが重要だと主張した。それに対してタルドは、すべての社会現象に共通する一般的な要素としての精神間の作用を挙げ、それを対象とする精神間心理学（心間心理学）こそが一般社会学であると主張した。

この討論の翌年にタルドが没したため、その後彼らが直接的に論争を交わすことはなかった。ただし、この年にデュルケムもタルドもそれぞれ別個に社会学の位置づけに関する論考を残している。以下にそれぞれ検討してみることにしよう。

2. 1903年のデュルケム：「社会学と社会諸科学」

デュルケムは『社会学年報』において社会学の部門分けを試みており、最終的に1909年の論文「社会学と社会諸科学」において「社会形態学」「社会生理学」「一般社会学」という彼独自の区分を確立した。しかし、今回われわれが注目するのは、デュルケムが1903年にP.フォコネとともに執筆した「社会学と社会諸科学」という同名の論文である。そこでデュルケムは、社会学を「社会科学の体系でありその集大成」（Durkheim et Fauconnet, 1903 :465）としてみなし、社会諸科学から独立に存在して社会的なもの一般を対象とするとされる「一般社会学」に対する批判を展開している。そこでは、J.S.ミルのように社会を構成するすべての要素を対象としようとする「一般的」社会学がまず批判されているが、とりわけ彼が標的にしたのは、すべての社会現象に共通する「一般的」要素を対象とする社会学のほうである。デュルケムはその他の社会諸科学とは無関係に社会の一般的要素だけを取り出して考えることはほとんど不可能であり、結局のところ特定の具体的社会現象から恣意的に材料を取り出すことになってしまうと批判する。この場合、社会学はその他の社会諸科学から独立して、それらを基礎づけるものと考えられているが、その社会学は何物も前提としていないことになってしまうのである。

3. 1903年のタルド：「心間心理学」

タルドは、彼が社会の構成要素としてみなした精神間作用や精神間関係を考察するにあたり、社会学という枠組を超えて「精神間の事実」一般を対象とする学問分野を想定するようになる。1901年に彼が発表した論文「社会的実在」「精神間心理学」においてすでにこうした発想は現れているが、このアイディアは1903年の「心間心理学」という論文においてこの「心間心理学」（inter-psychologie）という言葉で表されるようになる。心間心

理学は「主観的な側面から検討されたあらゆる社会的関係（肉体間の関係はのぞく）」だけでなく、「社会的なものを持たない多くの頭脳間の関係」を扱う総括的な科学であるとされている（Tarde, 1903 : 93）。

タルドはこの心間心理学を基礎として、それをさまざまな社会科学の分野に応用するという論法をとっている。たとえば、『模倣の法則』（1890）のような理論的著作において、彼は言語、宗教、法律、政治、経済、芸術といったさまざまな専門領域にみずからの原理を応用している。また、個別領域を扱った著作においても、『刑事哲学』（1890）から『経済心理学』（1902）に至るまで、彼の理論的諸原理を個別領域に応用するという姿勢は共通している。このように、精神間作用という基礎的要素は、単に社会学の方法論上の要請によって用いられただけでなく、それをすべての社会現象に共通して含まれる一般的要素としてみなすことで、心間心理学を社会学の指導原理にすることを意図して用いられていたことがわかる。そしてこのことがデュルケムとの新たな対立点となっているのである。

まとめ

このようにデュルケムとタルドは、方法論だけでなく社会学のあり方についても正反対の見方をしている。確かにタルドのような立場は、デュルケムが指摘しているとおり、一般的要素を想定する根拠が薄弱であると言えるだろう。特にタルドの場合は究極には個人の発明という偶然的な要因にまでさかのぼってしまうことから、社会学の枠組みから外れてしまっていることは否定できない。一方で、デュルケムの場合は、どこまでやれば社会諸科学が確立されたと言えるのかが不透明であるため、そこから引き出されるはずの社会学はいつまで経っても成立しえないのではないかという疑問が提起できるだろう。デュルケム自身も結局は彼の宗教社会学で用いられた諸観念を理論的原理としているように見える。

このようなデュルケム＝タルド論争の最終局面は、これまであまり注意されてこなかったが、たとえばジンメル形式社会学と両者の理論を比較することによって、新しい学説的評価を下すことができるかもしれない。こうした点が今後の課題となる。

参考文献

- Durkheim, É. et Fauconnet, P., 1903, Sociologie et sciences sociales, *Revue philosophique*, **55**, 465-97.
- Pourmin, M., 1904, La sociologie et les sciences sociales, *Revue internationale de sociologie*, **12**, 83-9, 161-7, 229-34, 309-13, 597-602, 877-8.
- Tarde, G., 1903, L'inter-psychologie, *Bulletin de l'Institut général psychologique*, **3**, 91-118.

〔報告2〕 山田陽子（広島国際学院大学）

デュルケムの道徳的個人主義と「心の時代」

近年、人間の精神の在り方や人格の望ましさを規準を、宗教的要請や当該社会の道徳というよりも、むしろ心理学的な語彙や視点によって説明しようとする状況が世界的規模で進行している。世界保健機構は心身のセルフケア、とりわけストレス・コントロールが「生活の質（QOL）」の向上に必須であるとしている。また、精神科医や心理学者や教育学者らによって数百種類の暴力防止プログラムやトラウマ防止・回復プログラムが共同開発され、犯罪者の矯正や幼稚園や小中学校における情操教育に採用されている。こうした潮流は、1980年代後半以降の日本にも「心のケア」や「心の教育」という形で押し寄せている。

かつて、自己形成や社会統制に決定的な役割を担ったのは宗教や道徳である。近代社会の道徳の基本原理は、人間の人格がこの上もなく神聖であり、あらゆる宗教の信者たちが神のために捧げるのに似た尊敬を受ける権利を持つとみなすものである（Durkheim 1893）。個人は「善きもの（bien）」としての道徳を求め、愛着し、「義務（obligation）」としての道

徳に畏怖の念をもって服従する（Durkheim 1924）。神への献身の代わりに、人格という普遍的な属性への畏敬と愛着という道徳律に従うことで個々人の人間性が高められるとともに、そうした普遍的価値へのコミットメントを通じて社会統合が可能になると考えられてきた。

しかしながら、社会を道徳的存在として構想する伝統的な社会学理論は、ポストモダンの思想群の登場、機能分化の一層の進展や複雑性の増大、価値や承認をめぐる対立抗争、少年犯罪などを前に再考を迫られている。そして、それと呼応するかのように心理学的な語彙や説明様式が特殊な悩みの解決法という範疇を超えて現代人の多くを巻き込み、自己の構築・維持・取替えや対人関係の操作、日常的な思考習慣・行動様式の成型加工に科学的正当性と多様なオプションを提供しつつ、非暴力的な社会統制装置としての機能を増大しつつある。

本報告では、こうした状況を鑑み、デュルケームの道徳的個人主義の観点から現代の「心の教育」について検討を加える。デュルケームが道徳の科学の確立を志向したことは周知の通りである。彼は産業化の進展とともに道徳の危機が課題となる中、人格に対する尊敬だけが社会的連帯を可能にするとした。この場合の人格とは、個々人のそれではなく、人格一般、個人一般のことを指す。個人化・個性化・自立化は道徳的個人主義に枠付けられて初めて新しい形の連帯を生み出す。

だが、理由なき殺人やいじめの加害者、キレル少年たちは人格に敬意を払わない。デュルケームの語によって言い換えれば、「人格崇拜」という近代社会の道徳ないし共同信仰を冒瀆する存在である。「心の教育」は、キレル少年事件の頻発や神戸事件などを直接のきっかけとして 1990 年代半ばに登場した。世論や教育関係者の道徳に関する危機感に基づくものであり、危うくなった共同信仰を維持しようとする試みであると捉えられる。

「心の授業」では、例えば次のようなことが行われる。まず土台となるのは、心身状態とストレス状態の自己点検、ストレッサーとストレス反応の認識、各種心理テストによる性格の把握、ストレスや感情の自己コントロール方法や認知の修正方法を学ぶことである。そして、これらの授業を通して、生徒各自が自尊心を高め、世界で唯一無二の大切な私と同様に私以外の他者の人格も価値があると実感すること、リラクゼーション法を日常生活で応用すること、ソーシャル・スキル・トレーニングやロールプレイによる自己主張訓練の成果を現実の人間関係において再現することなどによって、イライラや対人関係上の摩擦を減少させ、ストレスを緩和・阻止させる。その結果、いじめや「キレル」といった人格侵犯行為が生起しなくなり、人格の尊重が実現するとされている。

「心の授業」における「人格崇拜」は、ナルシズムをまとった愛すべき自己のモニタリングとストレスの個別的マネジメント、人間関係の戦略と訓練の成果などが総合的に首尾よく発揮された際に偶発的に現象する。個人を超えた道徳的理想に従う結果の「人格崇拜」というよりも、むしろ個人の自尊心や個別性が重視される。当該社会の「道徳的規律への服従」や「集団への愛着」は影を潜め、各自が無条件に自己の存在を肯定し、自らのライフスタイルを充実させることが強調されている。すなわち、「～すべき」や「～せねばならない」という善悪や道徳的価値を内面化した結果の社会統合というよりも、各自が自分の感情や欲求や個性を知り、身体・情緒面の問題を抱えずに日常生活を営むことによって自己と社会の安寧が達成すると考えるモデルである。そこで念頭に置かれている個人主義は、デュルケームの言う意味での「人格一般に対する崇拜」や道徳的個人主義というよりも、個々人の個別性や個性に強調点を置いた個人主義である。

Durkheim, E., [1893]1960, *De la division du travail social*, P. U. F. (1971, 田原音和訳 『社会分業論』 青木書店)

, 1924, *Sociologie et philosophie*, P. U. F. (1985 佐々木交賢訳 『社会学と哲学』 恒星社厚生閣)

山田陽子, 2005, 「『心』をめぐるコミュニケーション 『心の教育』における心理学的技術」 山中浩司編 『臨床文化の社会学 職業・技術・標準化』 昭和堂, 207-246 頁.

【第11回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 西山宝恵（東北大学）

パーソンズのデュルケム論 『社会的行為の構造』以後に着目して

パーソンズが『社会的行為の構造』（1937）において提示したデュルケム解釈は、その後どのような理論的進展あるいは変化を遂げたのか、また変化したとすればその意味するところは何であるか。本報告は晩年パーソンズまでの論稿を射程に含め、主に二つの論点に焦点をあてながら、この問いに対する解答を試みた。

ひとつめの論点は、「価値と規範の区別」の問題である。『構造』のなかでパーソンズは、デュルケムが『自殺論』（1897）において自己本位的自殺とアノミーの自殺とを区別したことに着目していた。このことは、パーソンズの解釈によれば、デュルケムが規範の強弱のみならず、価値の内容の相違についても考えはじめたことを意味していた。こう解釈することによってパーソンズは、デュルケムが近代社会を「規範の弱体化が進む社会」としてのみ捉えるのではなく、新しい価値規範を形成しうる社会として捉えたことを強調した。その後、「社会システムの統合理論へのデュルケムの貢献」（1958）のなかで、パーソンズは、デュルケムの『社会分業論』に「価値と規範の区別」を導入し、相互交換の一般メディアとしての貨幣に言及しながら有機的連帯の理論枠組みの精緻化を試みた。後にパーソンズ自身がこの論文を、自らの「理論的発展の重要な相のはじまり」と位置づけるように、60年代パーソンズのシンボリック・メディア論とデュルケムの有機的連帯論とは密接に関わっていた。

ふたつめの論点は、「拘束の意味変化」の問題である。パーソンズは、『構造』時点ではデュルケムの「拘束」の意味が徐々に理論的進展を経て「環境的事実による拘束」から「内面化された規範に自発的に従うことによる拘束」へ変化した、と考えていたが、70年代にいたって考えを改めている。むしろ「拘束」の意味は、「〔上の〕両方を独自の方法で結びつけ」たものへと変化した、という。デュルケムの言う社会的環境は、一方で、経験的にそこに存在する所与の環境であって行為者が認知的に理解し道具的に考慮すべき環境である。それと同時に、他方で、同じ社会的環境に関係をもっている行為者は、共通道徳にコミットし、形成する。

このような視座を得て70年代のパーソンズは、デュルケムが象徴としての「聖」という形で、認知的範疇と道徳的範疇との関連づけを提示したと評価した。パーソンズによれば、デュルケムが『宗教生活の原初形態』において行ったシンボルの分析において、「血」や「性」といった要素が重要な位置を占めている。そのことは、晩年パーソンズの「人間の条件パラダイム」の視座と共通する、という。動物有機体としての人間は、「血」や「性」を構成要素として共通に持っている。それらの要素は意味付与され、象徴化されて豊かな社会的意味をもつ。この意味づけと象徴化のメカニズムこそ、動物有機体を越えて人間が人間としての特質をもつ所以である。

パーソンズのデュルケム解釈の主眼は、近代社会における社会的紐帯をゲマインシャフト・ロマン主義的立場からではなく見出すことにある。その観点は『構造』以来のものであり、理論的には価値と規範の区別として表れていた。デュルケムの「もうひとつの個人主義」や「個人の宗教」は、パーソンズにとって「異種どうしのものを連帯させる」という特質をもつ「新しい価値」を意味している。

しかし、より多様な構成要素が連帯するためには、より普遍主義的な紐帯が必要となる一方で、より普遍主義的な紐帯は、より特定の紐帯とくらべて、多様な個々の人々を強く突き動かすコミットさせる力に乏しいのではないかと、というジレンマが存在する。ペラーは、まさにこの問題が、デュルケムを『原初形態』に導いた要因の一つであると考えた。アレグザンダー（1997）もまた、多様な現代社会における市民社会の可能性について論じる際に、同じ問題に触れて、高度に一般化された価値にうったえる普遍主義的紐帯を、透明なコミュニケーションや抽象的な手続き的言明として言い尽くしてしまうことに疑問を投げかけている。彼は、普遍主義的紐帯を現実的で具体的かつ日常的な生活世界の言葉に翻訳することをうったえる。本報告が示すところによれば、パーソンズのデュルケム論は、

この多元的連帯のジレンマに導かれて展開されたと意味づけることができる。

〔報告2〕 菊谷和宏（和歌山大学）

トクヴィル、デュルケーム、ベルクソン
社会学的人間観 / 社会観の歴史的形成と生の意味回復への方途

本報告は、社会学の、そしてその基盤を成す「社会」および「人間」概念の成立と深化の過程を、トクヴィル、デュルケーム、ベルクソンによる社会理論の一連の展開に即して、またフランス史との密接な連関において描き出す試みである。同時に、この過程で見失われた(社会的)生の意味を再び見出し確立するための方途も模索されている。

第一章として、トクヴィルの社会理論が、七月王制・第二共和制というその時代背景とともに検討される。アメリカ体験とともに、世界を超越的な部分と「習俗(mœurs)」「知的道徳的世界」などと呼ばれる世俗な部分に分ける思考様式を萌芽的にもっていたことが確認された後、1848年二月革命体験がその社会科学的認識に決定的影響を与えたことが指摘される。そしてまさにそこで、後にデュルケームが社会学を構築するための前提となる「社会(それ自体)」と「社会(科学)的人間観 = 社会を成し社会に生きる普遍的な人間性としての homme」が歴史的現実とともに立ち現れたことが示される。

ついで、こうした認識論的展開がその後旧体制とフランス革命の史的研究の中で完成されたことが確認されるが、同時にこのような社会学登場のための「地均し」が、それまで生の意味の源泉であった「超越的なもの」へのまなざしを失うことで、社会的な生の意味そのものを失う結果をもたらしたことが、トクヴィル晩年の死と信仰に関する思想を追いつつ示される。

続く第二章においてデュルケーム社会学とその時代(第三共和制)の分析がおこなわれる。

前の時代に用意された「社会」と「人間」と「社会科学」の各概念を基盤として、王党派と共和派の対立という歴史を背景にデュルケームは、超越性の全面的排除と社会現象の個人心理への還元の全面的拒否を大前提に、「客観的な科学としての」社会学構築を始める。が、それゆえに生は社会化され、生の意味喪失問題が解き難いものになってしまったことが、『自殺論』に依りつつ指摘される。

しかし、このような社会的認識は、ドレフュス事件体験によって大きく揺らぐとともに結果として一つの頂点に達する。即ち、この歴史的イベントを契機として、知的道徳的共通性をもつ「社会それ自体」を保証し支える源泉・権威が「人間的人格一般を結集の中心とする個人主義」として、世俗と超越の間に見出されたのである。

この後『宗教生活の原初形態』(1912)を始めとする晩年の宗教社会学研究において、知的共通性は認識範疇の共通性として、道徳的共通性は人格 = 魂の共通性として論じられ、「実証科学による超越性への接近」へと向かう新たな理論的展開の萌芽が見られるものの、「社会」にすべてを帰着させる循環論法からこの時点では脱し切れておらず、その意味で科学としての客観性を基礎付ける社会の確立にせよ、社会的生の意味の回復にせよ、十分な展開をおこなう前にデュルケームの寿命が尽きてしまったことが確認される。

「中間まとめ」と題された第三章では、社会を対象とする科学的認識というものが、構造的に超越的な基盤に立脚せねばならないことをあらためて指摘した上で、その超越的な基盤(人間性 = 人格 = 魂)が、外的な観察は不可能であっても感覚可能であること、即ち経験の範囲内にあることが主張され、以上すべての困難が由来する源としての sensible(可感的な)に新たな拡張された意味が与えられる。そこから「社会」や「人間」という基本概念も拡張され、それらを基盤とするいわば次段階の社会学の構想が提示される。

第四章では、前三章を受けてベルクソンの議論とその時代の分析がおこなわれる。デュルケームよりも長く生きた同時代人ベルクソンは、『宗教生活の原初形態』出版と同じ年、考察対象には外的に観察可能なものだけではなく内的に経験可能なものも含められると声明し、デュルケームの限界を明確に突破するに至る。この突破を可能にしたものは、デュルケーム死後、第一次大戦を経ることで、第三共和制がカトリシズムをもはや敵ではなく

むしろ自らの一部としていたという歴史的事情である。

かくしてベルクソンは、超越性へ突進する。彼は晩年の主著『道徳と宗教の二源泉』(1932)において、社会が社会的生の内部で最終的に説明がつくとの考えを真っ向から否定する。そして、キリスト教神秘家の記録を頼りに、超越的なものへと実証科学的に接近してゆく。この過程で「科学」「社会」「人間」の各概念が拡張され、最終的に人間性の源であり世界の 　　そしてもちろん社会の 　　統合原理・生の原理としての「愛」に行き着くのである。こうして、生の現実が、理論的に、そしてなにより経験的に、超越性を含んでいることが確認される。ここにこそ、社会学と生の意味問題解決の新たな基盤が置かれうるのだ。

最後に「おわりに」として、以上論じられた人間概念の限界と学史・思想史における「連関」の意味に対し、根本的な疑問が次なる課題として提出され、本報告は終了する。

【書評】 横井敏秀 (富山国際大学)

Smith, D. N., 1995, "Ziya Gökalp and Emile Durkheim : sociology as an apology for chauvinism ?," *Durkheimian Studies / Etudes Durkheimiennes* , n. s., vol. 1. : 45-50.

10 年前に発表された、わずか 6 ページほどの小篇を取り上げるのは、この論文がトルコ・ナショナリズムの旗手にして、熱烈なデュルケーミアンであったズィヤ・ギョカルプとデュルケーム本人との関連を正面から論じた、近年ではほとんど唯一の英語文献だからである。D.N.スミスによるこの論文が *Durkheimian Studies* に掲載されたことは、ギョカルプのデュルケーム受容という主題が、トルコ社会学史や思想史にさほど関心をもたないデュルケーム研究者の眼にも触れる稀有な機会を提供したという点で、たいへん意義深い事柄であったといえよう。しかしながら、その内容はかなりセンセーショナルかつ問題含みのものである。まずはスミスの論旨を要約しよう。

ズィヤ・ギョカルプは 1908 年の「青年トルコ革命」すなわち統一と進歩委員会に拠る「青年トルコ人」がトルコを国民統合への軌道に載せた政変の直後に頭角を現し、影響力を揮うに至った。オスマン帝国の多民族的コスモポリタニズムは「トルコ主義」という新たな情熱とダイナミックスに道を譲った。この「トルコ主義」は、主として 1911 年に統一と進歩委員会の中央委員会のメンバーとなった若きギョカルプの知的指導の下におかれていた。

新たに国民の統一を図るべき方途を探りつつ、ギョカルプは集合的沸騰と道徳的権威についてのデュルケームの考えを独特な形で適用するという洞察を得て、そこに希望を見出した。

しかしスミスによれば、ギョカルプは究極的に、デュルケーム理論を正しく受け継ぐことよりも「トルコの栄光」に、はるかに関心を抱いていた。デュルケームの社会学はギョカルプにとり、「彼自身の教説の舞台として」役立った。そしてそれはデュルケーム自身のものとは重要な点で決定的に異なっていた。「ギョカルプはデュルケーム的前提を実現したというよりこれを否定した」とスミスは説くのである。

「最近の議論には、デュルケーム社会学がある形態のナショナリズムと選択的な親和性をもっており、そのナショナリズムは内的必然性によって、大量殺戮を帰結するほど暴力的だと論じるものがある」。スミスは、これは真実からほど遠いとしながら、次のようにいう。ギョカルプは、「それを是認したとしてデュルケームが誤って攻撃された当のものを、本気で支持して」いたのだと。

実際、スミスによれば、ギョカルプのアンチ-ヒューマニスト的倫理と民族ゲマインシャフトの聖化は、他民族の価値を貶め、彼らを破滅させることにつながった。すなわち、第一次世界大戦中に「ギョカルプは知的にも実践的にも、アルメニア人ジェノサイドに非難に値する関与を行った」のである。「アルメニア人を含む少数民族の地位を判定し、彼らをどう扱うかを提案」することが、彼に与えられた任務であった。アルメニア人の「強制移住」= 駆逐により、少なくとも 20 万人の、おそらくは 150 万人にもおよぶ人命が失われた。戦争が終わったとき、彼は他の統一と進歩委員会の指導者とともに逮捕され、まさしくこの戦争犯罪のかどで告発されてマルタ島へ移送された。

要するに、ギョカルブはデュルケーム社会学を歪曲して自らに都合よく利用した「道を外れた『デュルケーム主義』(aberrant “Durkheimianism”）」の理論家であり、偏狭な民族主義的国民統合の論理をふりかざしてジェノサイドを帰結したショーヴィニストであったというのが、スミスの結論である。

ギョカルブと「アルメニア人ジェノサイド」との関連 以前より多かれ少なかれ取り沙汰されてきた はいかに理解されるべきか。審理を傍聴した人物の証言によると、(1) ギョカルブは、いかなる虐殺の存在をも否定し、アルメニア人の犠牲者は、トルコを裏切り、その背後を襲ったアルメニア人とトルコ人との戦闘の中で生じたと論じた。(2) だが、アルメニア人の「強制移住」の正当性については、躊躇なくこれを是認した、という(かかる主張は、今日この問題に関してトルコ側から出される弁明と、基本的に軌を一にする)。ギョカルブがどの程度深くこの問題に関与したか、また「強制移住」の実態をどれほど知りえていたかについては、詳らかではない。だが、彼の陳述にうかがえる、「敵性分子」とみなされた人々に対する容赦のない態度は、ギョカルブのナショナリズムの「影」の部分を端的に物語っている。少なくとも彼は決して潔白ではありえないし、この事件が彼の生涯に拭いがたい汚点を残したことは否定すべくもない。このことは、まずもって確認されねばならないだろう。

だが、多少ともギョカルブを読んできた者としては、次のような疑問を禁じえない。すなわち、たとえギョカルブがジェノサイドの責めを免れないとしても、はたしてスミスが主張するように、彼が理論的平面において構築したものは、畢竟デュルケームのショーヴィニスト的ヴァージョンにしかすぎなかったのだろうか、という問いである。

スミスの説くごとく、ギョカルブが首尾一貫して「道を外れた『デュルケーム主義』」の方向で歩みを進めていたならば、ある意味話はしごく明快である。だが私見では、ことはそれほど単純ではない。そもそも、スミスの主張が予想させるように、ギョカルブの著作は全体主義的でショーヴィニスティックな言説で満ち溢れているのであろうか。

たとえばスミスは、「戦時中、ギョカルブは個人の自由やイニシアティヴに何らの余地も残さないウルトラ・ナショナリストのパーспекティヴを擁護していた」という。しかし、これは事実とは異なる。ギョカルブが1917年(まさしく戦時中)に書いた「人格的道德」(Şahsi Ahlak)という論説がある。そこで彼は、個人人格にかかわる道德を消極的・積極的の2側面に区別し、前者を「人間人格を尊敬すべきものと考えてこれを犯さぬこと」としつつ、「個人人格の聖性をたんに侵犯しないことだけでは不十分」であるゆえ、「進んで他者に愛を示し助力すること」という後者の側面が必要だと説く。そして、戦時に人格的道德と祖国愛の道德とは相対立し、人格的道德の若干の規則は祖国愛の道德のために犠牲にせらるるとしながらも、「戦争が人格的道德に及ぼす害」は、この犠牲が「強制される結果」だと述べ、「2つの道德の対立は、意識にとり極めて嫌悪すべき戦場」であると論じている。また、「戦時に敵を殺すことは必ず要求される」にしても、「手に落ちた捕虜を愛護し憐れむことは変わらぬ義務」であり、「戦いのときにあってさえ、軍隊の流す血に心の痛みを感じ、命についてのかかる不吉な必要悪を呪詛することが不可欠」だとも主張する。さらにギョカルブは、この論説を次のような言葉で締めくくる。「社会的分業が始まって後、徐々に個人人格が形成されるため、諸個人が権利を獲得し始めることをわれわれはみた。その結果人間は、その個人性のためではなく、人格のために価値あるものとなり、尊敬に値する存在となる。社会的分業の帰結として、…… 諸個人は聖性を担い始めるのである。個人が人格的道德の要請に従うことは、自らの人格および他者の人格を尊敬に値すると考えることを意味するのだ」。ここからうかがい知れるのは、祖国愛の道德との矛盾に直面しつつも、なおも「個人人格」の尊厳性への深い関心を吐露するギョカルブの姿ではあるまいか。同様の関心は、時期を同じくする他の論説にも見出すことができる。「性的道德」(1917)では、デュルケームの「近親婚の禁忌とその起源」論文に依拠しつつ、女性の聖性に言及している。

世界大戦たけなわの時期に、ギョカルブが「人格の聖性」にさかんに言を費やしていたことは、彼の思想の方向性を吟味するうえで無視できない事実であると評者は考える。しかも彼が、デュルケームの個人人格をめぐる議論に理論的な支柱を求めていることはデュルケームの戦闘的とさえいえる個人主義には比すべくもないとしても 明白である。

またスミスは、「ギョカルプのスタンスは多くの点で紛れもなくトライチュケ的であった」として、「自らの人格の消失にさえ至るまでの国家への絶対的献身というプロイセンの理念」の唱道者であり、デュルケームがその汎ゲルマン的ショーヴィニズムを辛辣に批判したトライチュケにこそ、ギョカルプは接近していたと論断している。

しかし、ギョカルプの諸著作から、この断定と相容れぬ内容の記述を取り出すことは容易である。たとえばギョカルプは「権威」を、抑圧的でひたすら支配者への献身を強要する「sulta」と、人々が愛情をもって従う規律たる「velayet」の2種類に区分し、後者は自由と平等の精神に背馳するどころか、「われわれが完全に自由を所有した状態で、敬意を表する集合力」にほかならないとみなしている(1923; 1924)。彼が新生トルコを支える権威として期待したのは後者であった。ここにもデュルケームの影が揺曳している。

また、ギョカルプは近代的ネイションには民主主義的な政治システムを定着させることが重要であるとしたうえで、「民主主義とは、奴隷制、封建制、帝国主義、専制主義、ショーヴィニズム(şovenizm)、狂信、要するに自由と平等に対立する機構がどれだけあろうと、そのすべてを廃絶すること」だ、と述べる(1923)。教育論・大学論の分野でも、「自主独立の気象」「精神の自律」を涵養することの重要性が強調されている(1924)。さらに彼は、対外関係について、「人種間の平等」「ネイション間の平等」「ネイション間の相互敬愛」(いずれも1923)を説き、ネイション間の闘争・憎悪が社会進化の基本法則であるとするフォン・ベルンハルディを論駁しているが、このベルンハルディこそ、トライチュケの弟子であり、デュルケームがかの小冊子『世界に冠たるドイツ』(1915)でトライチュケもろとも手厳しく難じた人物にほかならない。以上のように、ネイション間の協調の推進をトルコ国内の民主主義(ただしデュルケームの意味ではなく、人民主権の謂い)の成長とパラレルな形で展望するギョカルプの視点は、そのリベラルな諸価値の追求において、デュルケームとさほど径庭のあるものではない。

このように、ギョカルプのナショナリズムには、少なくともその1つの重要な構成要素として、ショーヴィニズムとは対極にある思想傾向が、戦時中から終始一貫認められる。そして、デュルケーム社会学から学んだ概念装置や理論枠組がそれを支えていたこともまた、疑いえない事実であると思われる。彼をたんに言行不一致の徒とみなしたり、諸々のリベラルな言説はたんにショーヴィニズムという鎧を偽装する衣にすぎないと断罪するのはたやすいことである。評者はそうした見方には与しない。彼の自由・平等の礼賛は、マルタ流刑から帰還したのちより顕著になるが、これは機会主義的な宗旨替えというより、彼の思想に以前から内在していたリベラルな諸傾向が、オスマン帝国崩壊後のアナトリア・トルコ主義という新たな土壌を得て大きく開花したとみなすのが、より事実即した見方であろうとさえ考えている。

私見では、ギョカルプのリベラリズムを正當に評価したうえで、それを悲劇的に挫折させ、痛々しい敗北に追い込んだものは何であり、彼の思想のどこに、排外主義を正当化させる重大な論理的陥穽が潜んでいたのか。たとえば、彼の少数民族観の洗い直しや、パン・トルコ主義の分析は、その1つの焦点となる。これを探求することこそ、ギョカルプ思想の矛盾と謎の解明に向けての、望ましい研究の方向性であると思われる。ギョカルプに関する資料の丹念な収集と地道な解読作業を通じて、複雑な陰影に富んだギョカルプの思想世界の光と暗黒の両面とその内的連関を見据え、デュルケームとのかかわりをそのなかに適切に位置づけることが求められていよう。スミスの解釈は、ギョカルプの全体像ではなく、負の半身のみを。決してそれから眼を逸らしてはならないにしても

いたずらに独り歩きさせる危険をはらんでいる。それはやはり好ましいことではあるまい。

追悼 中 久郎 先生

中島道男（奈良女子大学）

本研究会の特別会員であった京都大学名誉教授中久郎先生が、2005年2月22日にお亡くなりになった。突然のことだった。

中先生には、本会の設立総会（2000年9月9日、於奈良女子大学）において、「今日におけるデュルケム理論の意義」というタイトルで講演をしていただいた（「講演要旨」は本会『ニューズレター』第1号に掲載）。その後もいろいろな機会に、本研究会が少しずつ発展していく様を喜んでくださり、また励ましてくださった。まだまだご指導をいただきたかったというのが、会員一同の気持ちであろう。

社会学とは、（認識対象にかんしていえば）「社会生活における人間の対人関連を分析焦点に据えながら、歴史的な社会的現実の構成と変動を研究する科学」と定義される先生は、この定義に関わる個別諸論題をめぐる「主要諸理論の学説史的研究」を重視される。「社会学が社会の学として構築されてきた過程で、それぞれの時代や社会のなかで診断のための用具として鍛えられてきた理論の変換の経過を、何よりも前提として謙虚に学ぶこと」を強調されるのである（『社会学原論』）。その「主要諸理論の学説史的研究」のひとつとして、とはいえ他の社会学者たちあるいは他の諸理論のなかでも格別の比重をかけてこられたのが、先生のデュルケム（先生ご自身は「デュルケム」と表記されていた）研究であった。

『デュルケムの社会理論』が公刊されたのは1979年のことである。もう25年以上も前になる。先生の関心事は、「多彩な彼の活動を根底においてささえ、それらに一貫した性格をとらせている認識原理」であった。デュルケムの社会概念についての徹底した理解、ということにほかならない。ベラーも述べているように、デュルケムの社会概念を理解することはデュルケム思想全体の理解にも等しい。先生が目指されたのは、デュルケム思想のいわば本丸を押さえることである。ここを押さえればデュルケムの全体が見渡されると言ってもよい。中デュルケム論のエッセンスは、今では周知のことだろうが、「デュルケムのいう社会を、集合的な思考や行為の仕方によって制御された 生きている系 と考え、それを動的秩序の自己形成系であるとみる」というものである。先生は *la vie sociale* を「社会生命」と解釈され、この社会生命のうちに活動しているものが、単に自然的エネルギーではなく、それを構成する人間の集合的な観念や意識によって支配されているということこそ、デュルケムの社会の根底にある、とされたのである。

デュルケム思想の本丸を一挙に突いたこの本の出現は、それ以後こんにちまでの多くのデュルケム研究に大きな刺激を与えつづけている。

先生の学問への意欲は晩年になるほどますます燃えあがっていたように思う。

大著『社会学原論』（1999）の「おわりに」には、その辺の先生の思いが生々しく語られている。「本書は、当初の予定を超えて、かなりの大冊となった。それにもかかわらず、なお論述しきれずはみ出すような、もっと広くかつ奥底知れぬものが自分のうちにあるのを感じる。社会学という学に託そうとした自らの思いを本書の論述のうちに盛り込めぬもどかしさと苛立ちは、なお持ち越された感が強い。／その数多い思いのうちには、敗戦時の旧満州での秩序崩壊のときの自らのドラスティックなカオス体験の占める比重は大きい。その自分が、戦後に生きてきた自らの『生』の証しを、社会の科学としての社会学の構成に、どれほど生かすことができたであろうか」。さらには「本書は・・・もっと早く刊行すべきであった。それが、思わぬ大病で倒れたこともあって大きく遅れた。一命は何とか取りとめ、一応回復に向かったものの、なお完治とは言い難い。带状疱疹も病根は引いたとはいえ、いつも錐で刺されるような背の痛みで今も苦しい。研究室においても、椅子よりもソファを常用し、休み時間はベッドとしての使用がほとんどである」。

満州体験の一端については、その後、『満洲国』の現実と理想 崩壊時の体験」という論文（『戦後日本のなかの「戦争」』所収）にまとめられている。満州の建国大学の「八期生として、国の崩壊の年に入学した最後の学生であり、満洲国の崩壊にともなう閉学時を体験したひとり」としての「生きられた世界」体験についてこう述べられている。「そ

の社会秩序崩壊時に生きた自らの体験が、その後の自分の人生を無意識ながらも規定してきたことは、やはり否み難い。／・・・この学 [= 社会学] の研究教育をもって職とし現在に到ったが、その間、西欧の学説などを読むとき、理論構築の基本モチーフが『社会秩序はいかにして可能か』にあると書かれている意味が、私には痛いくらい実感できた。そして、この論文でも、「既に七〇歳代も後半」になって「伝えるべきことはいくらでもあるがどれほど可能か」という思いを述べておられる。

先生は、自らの課題を次々とこなしておられたように見えながらも、胸の内では時間との壮絶な戦いをされておられたのだろう。その、社会学への燃える思いが、突然、病魔によって断られたのである。さぞ無念であったことと思う。今はご冥福を祈るばかりである。

中久郎先生 (1927.9.15~2005.2.22) 主要業績

- 『デュルケームの社会理論』創文社、1979年
- 『共同性の社会理論』世界思想社、1991年
- 『社会学原論』世界思想社、1999年
- 『米田庄太郎』東信堂、2002年
- 『戦後日本のなかの「戦争」』世界思想社、2004年 (編著)

追悼 佐々木交賢 先生

杉山由紀男 (創価大学)

創価大学名誉教授佐々木交賢先生が2005年6月28日に急逝された。79歳であられた。中久郎先生が逝去されたばかりであるのに、本研究会特別会員でありデュルケーム研究の大功労者である偉大な先達を相次いで失うこととなり、本当に悲しみに耐えない。ここに謹んでお悔やみ申し上げ、衷心より哀悼の意を表する。

佐々木先生は、デュルケームの社会学を深く研究された人らしく、人間の道徳性を非常に重んじられるとともに個人の自発性や自由な発想を愛するリベラリストであられた。創価大での最終講義で、先生は学生たちにこう語っている。「大事なことなのですが、デュルケームの社会学は自由・平等・博愛の原理に貫かれているということです。(中略)彼は人間の自由と尊厳は国家権力で支配できるものでないことを繰り返し強調しました。そういうところに私は非常に尊敬の念を持っています。これが私が彼の社会学の研究に身を投じようと思った理由の一つです」と。

先生によれば、先生とデュルケーム (の著作) との出会いは旧制二高時代である。新カント派などのドイツ哲学が当時の二高の主流だったようで、その中でフランス語を専攻した先生はフランス哲学を学ぶことを志し、デカルトやパスカルなどの哲学者たちの中にデュルケームの名を見出したという。そして次第にデュルケームに惹かれていくことになる。その後他の研究課題に取り組むも、再びデュルケーム研究に心血を注ぐことになったのは、「ウェーバーに優るとも劣らぬデュルケーム社会学およびフランス社会学の研究や翻訳があまりにも少ないことに気づいたこと。しかも、その数少ないデュルケーム研究も未だ独断と偏見に満ちたものであること。とりわけ、私自身デュルケーム社会学についてやはり多くの誤解をいただいていたことに気づいたこと。戦後新しい社会学研究が続出しているが、そこには大きな学問的混乱があり、かかる学問的混迷の時代には改めて古典を繙き、初心に立ち戻る必要があること。現代社会の諸問題の的確な解明にはデュルケーム社会学が大きな導きの星であることを強く感じた」(『デュルケーム社会学研究』) ことが理由であると語られている。

先生のデュルケーム研究が、これぞデュルケームの真実なりと先生が捉えた部分の忠実な記述を中心にしてデュルケームの全体像を再構成することに重点を置き、デュルケームについての論評は量的にはむしろ控えめな印象を受けるのは、このような理由によるものと推察する。しかし、「研究の対象、批判の対象には巨峰を選ぶべきであろう。私の社会学・批判の対象にはデュルケームとともに新明先生がおいでになる」(同上)と語る先生は、独自の鋭い視点から論評や批判を行い、偉大な先駆者たちの誠実な乗り越えをも指向されてい

たのである。

デュルケムへの関心から社会学へと進まれた先生は、このようなデュルケム研究における態度や目的を、ご自身の社会学観においても一貫して保持しておられるように思う。先生は「社会学は要するに究極的には人間を研究する科学」であり、それは「人間の行為、社会関係、集団、社会を、換言すれば人間の共同生活の様態、条件、現実の社会、文化等を解明する」専門科学であるが、「社会学と他の社会諸科学との相違は同じ対象の理解の仕方、同じ対象に迫る観点、もしくは焦点の相違であり、その相違は社会現象をモス (Marcel Mauss) のいう全体的社会現象として把握するということと、総合的認識を行なうということである。そして総合的認識という場合、共通現象の認識と、社会のあらゆる区画の研究、全体現象との関連による特殊現象の研究という2つの認識が含まれている」(以上『社会学の基礎(編著)』)として、社会学の「総合的認識」を強調する。つまり、デュルケムという巨大な存在の全体像を悪戦苦闘しながら描き出そうとした佐々木先生の目指す社会学とは、人間と社会の多様な関係性の諸相の研究を通して、両者を全体像において捉え描き出すものだったと言える。この点は、理論・学説研究だけでなく、地域社会研究や社会福祉研究の分野での多くの実証的な調査・研究を晩年にいたるまで続けられた、そのお仕事ぶりからも窺うことができる。

結びに、佐々木先生の業績は研究・教育の面にとどまらず、とりわけ日仏社会学会会長として尽力された日仏の学術・文化の交流と相互理解を進める数々の事業は特筆されるべきであると申し上げたい。このような学会会長としての責務や勤務校での雑務から解放され、いよいよこれから研究に専念していただけたと思った矢先の突然の先生の死。本当に残念でならない。しかし、永い地味な努力を尊ばれた先生が、自ら最期の時まで倦むことなくあらゆる努力を続けられて見事に逝かれたその姿から、きっと充実と幸福の人生であられたものと拝察する。先生の温顔が浮かんでは消え、消えては浮かんでくる毎日である。佐々木先生に教え示していただいたすべてのことに心から感謝し、ここに先生ゆっくりとお休みくださいと申し上げる。

佐々木交賢先生(1926.4.24.~2005.6.28.)主要業績

- 『宣伝論』高山書店、1966年
- 『デュルケム社会学研究』1978年、恒星社厚生閣
- 『フランス社会学の源流』1980年、杉山書店
- 『社会主義とアノミー』1990年、恒星社厚生閣
- 『デュルケム再考』(編著)1996年、恒星社厚生閣

【 会 員 業 績 】

ジンメル研究会・デュルケム / デュルケム学派研究会編, 2005, 『高野山カンファレンス 2004 デュルケム = ジンメル合同研究会報告書』

濱口晴彦・夏刈康男編, 2005, 『日仏社会学叢書 第一巻 デュルケム社会学への挑戦』恒星社厚生閣.

大野道邦編, 2005, 『日仏社会学叢書 第二巻 フランス社会学理論への挑戦』恒星社厚生閣.

斉藤悦則・荻野昌弘編, 2005, 『日仏社会学叢書 第三巻 ブルデュー社会学への挑戦』恒星社厚生閣.

夏刈康男・小林幸一郎・杉山由紀男編, 2005, 『日仏社会学叢書 第四巻 日仏社会論への挑戦』恒星社厚生閣.

佐々木交賢・樋口晟子編, 2005, 『日仏社会学叢書 第五巻 共生社会への挑戦 日仏社会の比較』恒星社厚生閣.

池田祥英, 2005, 「タルドとデュルケムの論争: デュルケム主要著作に対するタルドの批判を中心として」大野道邦編, 前掲書, 135-163.

Ikeda, Y., 2005, La notion d'« imitation » dans la criminologie tardienne, *Champ pénal, Les*

- criminologiques de Tarde* mis en ligne le 14 septembre 2005. URL : <http://champpenal.revues.org/document265.html>. Consulté le 12 décembre 2005.
- 江頭大蔵, 2005, 「統合と規制 から 聖と俗 へ デュルケーム自殺類型論の再検討」 濱口晴彦・夏刈康男編, 前掲書, 203-226 .
- 大野道邦, 2005a, 「苦痛の社会学 デュルケーム再訪」『研究教育年報』(奈良女子大学文学部), 創刊号: 79-87 .
- , 2005b, 「名誉の社会学 現代における名誉の可能性」『社会学論集』(奈良女子大学社会学研究会), 12: 11-23 .
- 岡崎宏樹, 2005a, 「デュルケーム理論の現代性 エゴイズム・アノミー・共同体をめぐって」ジンメル研究会・デュルケーム/デュルケーム学派研究会編, 前掲書, 8-15 .
- , 2005b, 「贈与としてのボランティア」『日本ボランティア学習研究』(日本ボランティア学習協会) 6: 21-25 .
- 小川伸彦, 2005a, 「事件・シンボル・制度 法隆寺金堂壁画焼損と『文化財』の文化社会学」『奈良女子大学社会学論集』12: 115-138 .
- , 2005b, 「文化のコントロール 文化財保護法の立法過程分析」宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在』世界思想社, 300-315 .
- 菊谷和宏, 2005a, 『トクヴィルとデュルケーム 社会学の人間観と生の意味』(第6回日本社会学史学会奨励賞受賞), 東信堂 .
- , 2005b, 「デュルケームとベルクソン: 超越への実証科学的アプローチ 普遍性の再建に向けて」, 大野道邦編, 前掲書, 105-133 .
- 小林孝雄, 2003, 「ルーマンのメディア論」松本和良他編『システムとメディアの社会学』恒星社厚生閣, 67-95 .
- , 2004a, 「コミュニケーション・メディアとしてのマスメディア」松本和良他編『シンボルとコミュニケーションの社会学』恒星社厚生閣, 61-93 .
- , 2004b, 「デュルケームとルーマン 化合の法則をめぐって」『日仏社会学年報』14: 23-41 .
- , 2005a, 「デュルケームと社会システム理論 個人主義と世界社会」濱口晴彦・夏刈康男編, 前掲書, 99-119 .
- , 2005b, 「新明正道の本源的機能主義」『新明社会学研究』10: 108-113 .
- 嶋守さやか, 2005a, 「精神保健福祉士実習事後指導『ふりかえり学習』における実習生の変化と成長 実習生の語りの分析からみえるもの」(宇都宮みのり氏との共著), 『福祉研究』(日本福祉大学社会福祉学会) 93: 48-62 .
- , 2005b, 「高齢者の権利擁護」西下彰俊・浅野仁・大和三重編『社会福祉士・介護福祉士養成テキスト 高齢者福祉論 精選された基本の知識と実践への手引き』川島書店, 115-139 .
- 杉谷武信, 2005, 「デュルケームの社会的連帯の概念の研究 『社会分業論』における共感や愛着の問題について」濱口晴彦・夏刈康男編, 前掲書, 47-67 .
- 杉山直樹, 2002, 「ラヴェッソンという鏡像」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』9: 29-78 .
- , 2003, 「私たちをかたちづくる力」(解説)『ベルクソン 道徳と宗教の二つの源泉 中公クラシックス W32』中央公論新社, 1-26 .
- , 2004, 「J. S. ミルとフランス・スピリチュアリズム」『研究年報』(学習院大学文学部) 50: 1-22 .
- 杉山由紀男, 2005, 「国家とどう付き合うか 民主主義へ モンテスキューとデュルケームの民主政論に学ぶ」夏刈康男・小林幸一郎・杉山由紀男編, 前掲書, 153-189 .
- 田中拓道, 2005a, 「フランス福祉国家の思想的源流(1789~1910年) 社会経済学・社会的共和主義・連帯主義(3)」『北大法学論集』55(5): 93-146 .
- , 2005b, 「フランス福祉国家の思想的源流(1789~1910年) 社会経済学・社会的共和主義・連帯主義(4)」『北大法学論集』56(1): 97-146 .
- , 2005c, 「フランス福祉国家の思想的源流(1789~1910年) 社会経済学・社会的共和主義・連帯主義(5・完)」『北大法学論集』56(2): 103-163 .
- , 2005d, 「社会的シティズンシップの両義性 福祉国家の危機とは何か?」『創文』481: 1-5 .

- , 2006, 『貧困と共和国 社会的連帯の誕生』人文書院 .
- 中島道男, 2005a, 「デュルケミアン思想における感情と知識社会学」大野道邦編, 前掲書, 165-189 .
- , 2005b, 「道徳の理論と社会の理論 ジグムント・バウマン」『奈良女子大学 社会学論集』12: 25-41 .
- , 2005c, 「書評 巻口勇一郎『デュルケム理論と法社会学 社会病理と宗教、道徳、法の相互作用』」『現代の社会病理』(日本社会病理学会編) 20: 129-132 .
- 西山宝恵, 2005, 「後期パーソンズの宗教社会学の視座」『社会学研究』77: 81-100 .
- 林 大造, 2005a, 「デュルケムにおける宗教、モースにおける呪術 現代社会における社会像と人間像」ジンメル研究会・デュルケム/デュルケム学派研究会編, 前掲書, 40-46 .
- , 2005b, 「マルセル・モースの身体論 聖なるものなき道徳と呪術の身体」大野道邦・油井清光・竹中克久編『身体社会学 フロンティアと応用』世界思想社, 139-162 .
- 藤吉圭二, 2005a, 「モースの社会理論 全体的人間と社会的連帯」大野道邦編, 前掲書, 27-52 .
- , 2005b, 「高野山古地図を利用した自己増殖的デジタル教材作成の研究」『平成16年度新生わかやま共同研究支援事業報告書』(高等教育機関コンソーシアム和歌山) 35-49 .
- Mikami, T., 2004, Habermas' Acceptance of Parsons and the Renewal of Norm; The Construction of Normative Theory in Contemporary Sociology, 『国際文化学研究』22,23 .
- , 2005, Sociology of Knowledge and Sociology of Culture in Japan; Prewar Period, Postwar Period and Postmodern Period, in Ilija Srubar and Shingo Shimada(Hrsg.) *Development of Sociology in Japan. Jahrbuch für Soziologiegeschichte*. VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- 三上剛史, 2005, 「身体論への知識社会学的断章 「身体」という場所」大野道邦・油井清光・竹中克久編『身体社会学』世界思想社, 33-57 .
- 山田陽子, 2005, 「『心』をめぐるコミュニケーション 『心の教育』における心理学的技術」山中浩司編『臨床文化の社会学--職業・技術・標準化』昭和堂, 207-246 .

☞ お知らせ ☜

2005年4月に開催された第10回研究例会の総会におきまして、研究会の運営体制の変更が認められましたので、ご報告いたします。まず、本会設立時から筆頭世話人をつとめてこられた大野道邦会員が、奈良女子大学退職を機に本会の運営業務から退き、代わって同大学の小川伸彦が世話人に就任いたしました。大野先生には新たに設けられた本会の会長に就任していただき、今後とも研究会の発展にご協力をいただくこととなります。また、財政基盤を確かなものとし、ジンメル研究会との合同シンポジウムのような新たな企画を充実させるため、年会費を1,000円から2,000円に値上げいたします。会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

§ 編集事務局より §

2005年は本研究会にとって悲しい年となりました。2月22日には中久郎先生、6月28日には佐々木交賢先生という、研究会を温かく見守りそして力強く導いてくださった特別会員の2先生の、相次ぐご逝去の報に耳を疑った方も多いでしょう。本号では特別企画として、世話人中島と佐々木先生の愛弟子の杉山由紀男会員による追悼文を掲載いたしました。両先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

さて、4月には太田健児会員のご尽力で尚絅学院大学にて、また10月には池田祥英会員のご尽力で早稲田大学にて、本研究会はそれぞれ第10回、第11回の例会を開くことができました。早稲田大学での研究例会は、同大学の坂田正顕先生のご協力なしには実現できませんでした。お忙しい中、報告者やコメンテーターをお引き受けいただいた皆様など関係各位に、心より感謝申し上げます。

次回の第12回研究例会は、梅沢精会員のお世話により、2006年4月22日(土)に新潟産業大学(新潟県柏崎市)で開催する予定です。会員の皆様のご参加をお待ちいたしております。